

至急

送付

大正五年二月廿四日發

通第二課

01908號

通外第... 通信者通信局長  
局長印

海底電信線保護高國聯合  
條約訂則改正法律案、果否仰  
海底電信線保護高國聯合條約訂則  
改正法律案、高國議會、提出せらる  
ハ案為念別紙及仰送付可也

第3類  
第181項  
第5號

大正五年二月廿六日記錄第二部接受

通信者經理局活版工場印刷

2-1830

0005

新舊對照  
海底電信線保護萬國聯合條約罰則改正法律案

大正五年三月廿六日記録第二部接受

提案理由

現行海底電信線保護萬國聯合條約罰則ハ明治三十五年ノ制定ニ係リ刑法其ノ他ノ刑罰規定ニ對スル權衡上刑ヲ變更シ且其ノ不備ヲ補フノ要アリ又無線電信ノ發達ニ伴ヒ船舶ヨリ相當官憲ニ届出ヲ要スル場合之ニ依ラシムルコト、為スノ要アリ是レ本案ノ要旨ナリ

海底電信線保護萬國聯合條約罰則

第一條 海底電信線保護萬國聯合條約ニ依ル海底  
電信線ヲ切斷又ハ破損壞シ申テ通信ヲ障害得シ  
又ハ障碍スハキ危險ヲ生セシムタル者ハ十月以  
上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五十圓以下ノ罰金ヲ  
附加ス七年以下ノ懲役又ハ五百圓以下ノ罰金ニ  
處ス但シ海底電信線ヲ布設又ハ修繕スルニ付已  
ムコトヲ得サルニ出テタル者ハ此ノ限ニ在ラズ  
其ノ未タ遂ケサル者ハ刑法未遂犯罪ノ例ニ照シ  
テ處斷ス  
前項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス  
過失ニ因リ前第一項ノ海底電信線ヲ切斷又ハ破

損シ因テ通信ヲ障害シ行為ヲ為シタル者ハ五十  
圓千圓以下ノ罰金ニ處ス

改正理由

刑法其ノ他ノ刑罰規定ニ對スル権衡上刑ヲ變  
更シタリ  
海底電信線ヲ布設又ハ修繕スルニ付已ムコト  
ヲ得ルシテ海底電信線ヲ損壞シタル者ハ海底  
電信線保護萬國聯合條約ニ於テハ之ヲ罰セサ  
ルコトニ規定セルモ現行法ハ之ニ付何等規定  
スル所ナキヲ以テ之ヲ補定シタリ  
尚字句ノ整理ヲ為シタリ

第二條 過失ニ因リ又ハ自己ノ生命若ハ船舶ヲ保  
 護スル為又ハ海底電信線ヲ布設若ハ修繕スルニ  
 付已ムコトヲ得ヌシテ海底電信線ヲ切斷又ハ破  
 損壞シタル者ハ其ノ船舶ノ初メテ到着シタル迄  
 ニ無線電信ニ依リ電信官署又ハ帝國領事館ニ届  
 出ツハシ無線電信ニ依ルコトヲ得サルトキハ第  
 初ニ著船シタル時ヨリ二十四時間内ニ其ノ地ノ  
 電信官署又ハ警察官署ハ外國ニ於テハ其ノ地所  
 在ノ帝國領事館ニ到着ノ時ヨリ二十四時間以  
 内ニ届出ツヘシ  
 前項ノ規定ニ違反シタル者ハ二十圓二百圓以下  
 ノ罰金ニ處ス

改正理由  
 刑ヲ変更シ且字句ヲ整理シタルコト前條ノ場  
 合ニ同シ  
 現行法ハ過失ニ依リ海底電信線ヲ損壞シタル  
 者ニ對シテモ相當官憲ニ届出ツヘキコトヲ命  
 スルモ犯罪者ニ届出ノ義務ヲ負ハシムルハ不  
 條理ニシテ實效少キヲ以テ之ヲ廢止シタリ  
 現行法ハ海底電信線ヲ損壞シタル場合ノ届出  
 ニ對シ無線電信ノ使用ヲ認メ居ラサルモ無線  
 電信ノ發達セル今日ノ状況ト前記届出ノ急速  
 ラ要スル事情トニ鑑ミ之ヲ使用ノ義務ニ付規  
 定シタリ

又現行法ハ前記届出ノ官憲中ニ警察官署ヲ加  
フルモ實際其ノ必要ナキヲ以テ削除シタリ

第三條 海底電信線保護萬國聯合條約第五條第二  
項第三項乃至第三項本又ハ第六條ノ規定ニ違反  
シタル者ハ百圓千圓以下ノ罰金ニ處ス

改正理由

刑ヲ変更シ且字句ヲ整理シタルコト第一條ノ  
場合ニ同シ

第四條 海底電信線保護萬國聯合條約第十條第二  
項ノ場合ニ於テ公書ノ呈示ヲ拒ミタル者ハ由十  
圓三百圓以下ノ罰金ニ處ス

暴行又ハ脅迫ヲ以テ其前項ノ呈示ヲ拒ミタル者  
ハ由月以上四年三年以下ノ重禁錮ニ處シ五十圓  
以下ノ罰金ヲ附加シ懲役ニ處ス

改正理由

刑ヲ変更シ且字句ヲ整理シタルコト第一條ノ  
場合ニ同シ

附則

23

...

...

...

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

...

...

...

2-1830

00 12

アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

<http://www.jacar.go.jp/>

海底電信線保護萬國聯合條約附則

大正五年二月廿六日記録第二部受

2-1830

0013

アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

<http://www.jacar.go.jp/>



○法律第二十七號 明治三十五年三月十八日

海底電信線保護萬國聯合條約罰則

第一條 萬國聯合條約ニ依ル海底電信線ヲ切斷又ハ破損シ因テ通信ヲ障害シタル者ハ一月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス其ノ未タ遂ケサル者ハ刑法未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

過失ニ因リ前項ノ海底電信線ヲ切斷又ハ破損シ因テ通信ヲ障害シタル者ハ五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二條 過失ニ因リ又ハ自己ノ生命若ハ船舶ヲ保護スル為己ムヲ得スシテ海底電信線ヲ切斷又ハ破損シタル者ハ其ノ船舶ノ初メテ到着シタル地

ノ電信官署又ハ警察官署（外國ニ於テハ其ノ地所在ノ帝國領事館）ニ到着ノ時ヨリ二十四時間以内ニ届出ツヘシ

前項ノ規定ニ違反シタル者ハ二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第三條 條約第五條第一項第二項第三項及第六條

ノ規定ニ違反シタル者ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

第四條 條約第十條第二項ノ場合ニ於テ公署ノ呈

示ヲ拒ミタル者ハ四十圓以下ノ罰金ニ處ス

暴行脅迫ヲ以テ其ノ呈示ヲ拒ミタル者ハ四月以

上四年以下ノ重禁錮ニ處シ五十圓以下ノ罰金ヲ

附加ス

附則

明治十八年七月布告第十八號海底電信線保護萬國聯合條約罰則ハ之ヲ廢止ス

海底電信線保護萬國聯合條約

2-1830

00 15

アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

<http://www.jacar.go.jp/>

○ 布告第十七號 明治十八年七月十七日

明治十七年四月佛蘭西國巴黎府ニ於テ列冊海底電信線保護萬國聯合條約ニ加入ス

右奉 勅旨 布告候事

千八百八十四年三月十四日巴黎府ニ於テ

各國ノ全權調印シタル海底電信線保護萬

國聯合條約譯文

條約書

佛蘭西共和政府大統領閣下 普魯西黨獨逸皇帝陛下 亞爾惹丁聯邦大統領閣下 奧地利黨洪牙利皇帝陛下 白耳義皇帝陛下 伯西爾皇帝陛下 哥斯太利加共和政府大統領閣下 丁林皇帝陛下 下度美尼哥共和政府大統領閣下 西班牙皇帝陛下 北米合衆國大統領閣下 哥倫

比亞合衆國大統領閣下 大不列顛愛爾蘭黨印度皇帝陛下 下牙德麻刺共和政府大統領閣下 希臘皇帝陛下 伊太利皇帝陛下 土耳其皇帝陛下 荷蘭黨盧森堡皇帝陛下 波斯皇帝陛下 葡萄牙亞爾加揮皇帝陛下 羅馬尼亞皇帝陛下 全露西亞皇帝陛下 薩爾波度兒共和政府大統領閣下 攝兒比亞皇帝陛下 瑞典黨諾威皇帝陛下 烏拉藝東部共和政府大統領閣下 海底線ヲ經過スル電氣通信ヲ保護スルコトヲ冀望シ夫レカ為メニ條約ヲ締結セシムル欲シ各其ノ全權委員トシテ左ノ人々ヲ任命ス

(人名ハ畧之)

右ノ全權委員ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ善良正當ト認メタルニ因リ左ノ數條ヲ約定ス

第一條

此ノ條約ハ諸政府ノ管領海中ニアルモノヲ除クノ  
外部ノ法律ニ依テ布設シ且條約國ノ内一國若ハ數  
國ノ領地殖民地又ハ屬地ニ陸揚シタル海底電信線  
ニ適施スルモノトス

第二條

故意ト疎虞懈怠トフ問ハス海底電信線ヲ切斷又ハ  
破損シ因テ電氣通信ノ全部又ハ一部ヲ妨害シ若ハ  
不通ニ致シタルトキハ之ヲ罰スヘキモノトス但シ  
損害要償ノ為メ私訴ヲ起スモ妨ケナカルヘシ  
海底電信線ノ切斷又ハ破損ヲ避ケル為メ精々注意  
ヲ加フルモ自己ノ生命或ハ船體ノ安寧ヲ保護スル  
正當ノ目的ニテ已ムヲ得ス其ノ切斷又ハ破損ヲ為  
シタルトキハ此ノ條約ヲ適施セサルモノトス

第三條

條約國政府其ノ領地ニ海底電信線ノ陸揚ヲ許可ス  
ルトキハ成ルヘク之ヲ電信線布設ノ位置及該線ノ  
大小長短ニ關シ電信線ノ安全ヲ保ツル為ニ適當ナ  
ル條件ヲ定ムルコトヲ約ス

第四條

一ノ海底電信線ノ所有者其ノ線ヲ布設シ或ハ之ヲ  
修繕スル際他ノ海底電信線ヲ破損又ハ切斷スルト  
キハ其ノ切斷又ハ破損ノ修繕ニ必要ナル費用ヲ負  
擔スルシ但シ場合ニヨリ此ノ條約第二條ヲ適施スルモ妨ケナカルヘシ

第五條

海底電信線ノ布設又ハ修繕ニ從事スル船舶ハ他ノ  
船舶トノ衝突ヲ豫防スル為メ條約國政府協議ノ上

己ニ制定シ或ハ向後制定スヘキ信號規則ヲ遵奉ス  
ヘシ  
海底電信線ノ修繕ニ從事スル船舶右信號ヲ掲クル  
トキハ之ヲ認め又ハ認め得ヘキ地位ニアル他ハ船  
舶ハ其ノ修繕ノ工事ヲ妨ケサル爲メ少クモ右船舶  
ヨリ一海里ノ距離ニ退キ若ハ遠サカルヘシ  
漁人網又ハ漁具ヲ投スルモ亦同一ノ距離ニ於テス  
ヘシ  
然レトモ右信號ヲ掲ケタル電信船ヲ認め又ハ認め  
得ヘキ地位ニアル漁船ハ其ノ信號ノ命ニ従フニ付  
二十四時以内ノ猶豫ヲ有スヘシ右時間中ハ其ノ漁  
船ノ運轉ニ妨害ヲ加フヘカラヌ  
電信線ハ成ルヘク速ニ其ノ工事ヲ終ルヘシ

第六條

海底電信線ヲ布設スルトキ若ハ切斷破損セシトキ  
海底電信線ノ位置ヲ示ス爲メニ設ケタル浮標ヲ望  
見シ又ハ望見シ得ヘキ地位ニ居ル船舶ハ少クモ其  
ノ浮標ヨリ海里四分一ノ距離ニ遠サカルヘシ  
漁人網又ハ漁具ヲ投スルモ亦同一ノ距離ニ於テス  
ヘシ

第七條

凡船舶ノ所有者海底電信線ニ損害ヲ加ヘサル爲メ  
ニ錨或ハ網又ハ其ノ他ノ漁具ヲ失ヒタルコトヲ證  
明スルトキハ海底電信線ノ所有者ヨリ其ノ賠償ヲ  
爲スヘシ  
其ノ賠償ヲ得ント欲セハ其ノ損失ノ後直チニ之ヲ

證明スル為乗組人ノ證言ヲ添ヘタル調書ヲ成ルヘク作ルコトヲ要ス且其ノ船長ハ右事件アリシ後初テ立寄り又ハ歸著シタル港ニ於テ其ノ著船ヨリニ十四時内ニ之ヲ其ノ掛官署ニ届出ルコトヲ要ス此掛官署ハ之ヲ其ノ海底電信線所有者ノ所屬國領事廳ニ報告スヘシ

第八條

此ノ條約ヲ犯ス罪ヲ審判スルニ付テハ管轄裁判所ハ違犯船ノ所屬國ノ裁判所トス然レトモ前項ノ如ク實施スルコト能ハサルトキ此ノ條約ヲ犯ス罪ヲ罰スルニハ條約國各自ノ法律又ハ萬國條約ニ基キ定メタル刑事裁判管轄ノ總則ニ從テ各其ノ國民ノミヲ處分スヘキモノトス

第九條

此ノ條約第五條及第六條ニ記載シタル犯罪ノ起訴ハ各國ノ政府自ラ之ヲ行フカ又ハ政府ノ名ヲ以テ之ヲ行フヘシ

第十條

此ノ條約ヲ犯ス罪ハ都テ之ヲ裁判スヘキ裁判所所  
在國ノ法律ニ於テ許ス所ノ證據法ヲ以テ之ヲ證明  
スルコトヲ得  
軍艦ノ司令官又ハ條約國ノ内一國ヨリ特ニ犯罪審  
査ノ為メニ派遣シタル船舶ノ司令官ニ於テ軍艦ニ  
非ナル船舶此ノ條約ヲ犯ス罪ヲ行ヒタルト思量ス  
ルトキハ其ノ船長或ハ船頭ニ該船所屬ノ國名ヲ證  
明スヘキ公書ヲ見ント要求スルコトヲ得其ノ司令  
官ハ此ノ公書ヲ閱覽シタル旨ヲ直チニ其ノ示サレ

タル書中ニ附記スヘシ  
且該官ハ犯罪船ノ何國ニ屬スルヲ問ハス調書ヲ作  
ルコトヲ得此ノ調書ハ該官ノ所屬國ニ於テ使用ス  
ル語ヲ以テ其ノ國ニ行ハルル定式ニ從フテ之ヲ記  
スヘシ又此ノ調書ハ之ヲ引用スヘキ國ニ於テ其ノ  
法律ニ從ヒ證據トスルコトヲ得被告人及證人ハ各  
自ノ國語ヲ以テ要用ト思惟スル説明ヲ調書ニ加記  
シ或ハ之ヲ加記セシムルノ權アリ此ノ加記ニハ法  
ニ依テ手署スヘキモノトス

第十一條

此ノ條約違犯ノ審理及判決ハ現行ノ法律規則ニ觸  
レサルヲケ成ルヘク簡略ニ施行スヘシ

第十二條

條約國政府ハ此ノ條約ノ施行ヲ確實ナラシメンカ

爲ノ就中此ノ條約第二條第五條及第六條ノ條款ヲ  
犯シタル者ヲ禁錮若ハ罰金或ハ此ノ二刑ヲ以テ罰  
スル爲メ必要ノ條規ヲ定メ又ハ其ノ議案ヲ立法官  
ニ提出スルコトヲ得ス

第十三條

條約國政府ハ此ノ條約ノ目的ニ基キ各其ノ本國ニ  
於テ已ニ布告シ又ハ向後布告スヘキ法律ヲ互ニ報  
告スヘシ

第十四條

此ノ條約ニ同盟セサル國ト雖請求スルニ於テハ同  
盟ニ加入スルコトヲ得其ノ加入ハ外交上ノ手續ニ  
依テ佛蘭西共和政府ニ報告シ該政府ハ之ヲ各同盟  
政府ニ通報スヘシ

第十五條  
此ノ條約ノ條款ハ交戦國自由動作ノ權ニ少シモ妨  
碍ヲ加フヘカラサルモノトス

第十六條  
此ノ條約ハ條約國政府ニ於テ向後協議約定スヘキ  
日ヨリ之ヲ實施スヘシ  
此ノ條約ハ其ノ日ヨリ五ヶ年間之ヲ施行スヘシ而  
シテ各條約國ノ内一國ニテモ五ヶ年ノ期限ノ終ル  
十二ヶ月前ニ於テ此ノ條約ノ効力ヲ廢止スル旨ヲ  
通知セサルニ於テハ此ノ條約ハ引續キ一ヶ年間之  
ヲ施行スヘシ其ノ後モ亦此ノ如ク一ヶ年ヲ以テ一  
期トシテ施行スヘキモノトス  
條約國ノ内一國ヨリ此ノ條約ヲ拋棄スル旨ヲ通知

スルトキハ其ノ拋棄ハ唯其ノ國ニ對シテノミ効  
ルモノトス

第十七條

此ノ條約ハ各政府之ヲ批准スルコトヲ要ス此ノ批  
准ハ巴里府ニ於テ成ルヘク速ニ之ヲ交換シ遲クモ  
一ヶ年内ニハ全ク交換ヲ終ルヘキモノトス  
右ノ條々ヲ確證スル爲メ各國ノ全權委員各茲ニ手  
記捺印ス  
千八百八十四年三月十四日巴里府ニ於テ各條約書  
二十六通ヲ作ル

(署名ハ畧之)



追加條約  
 海底電信線保護ノ爲メ本日締約シタル條約ノ諸條  
 款ハ第一條ノ明文ニ基キ大不列顛皇帝陛下ノ領ス  
 ル殖民地及屬地ニ之ヲ適施スルモノトス但シ左ニ  
 記載シタルモノハ此ノ限ニアラス

- 一 加那太
- 一 テール、ヌーグ
- 一 喜望峯
- 一 那多兒
- 一 新南珈斯
- 一 維太利
- 一 公斯蘭
- 一 太斯馬尼

- 一 南豪斯太利
- 一 西豪斯太利
- 一 新西蘭

然レトモ若巴里駐劄大不列顛皇帝陛下ノ使臣ヨリ  
 佛國外務卿へ前記殖民地或ハ屬地ノ名ヲ以テ條約  
 ニ加入スル旨ヲ通知スルトキハ該地ニ限り本條約  
 ノ諸條款ヲ適施スルモノトス  
 此ノ如クニシテ本條約ニ加入シタル前記ノ殖民地  
 或ハ屬地ハ條約書ト同一ノ方法ニ依テ退盟スルコ  
 トヲ得若シ其ノ殖民地又ハ屬地中ノ一ニ於テ退盟  
 セントスルトキハ巴里駐劄大不列顛皇帝陛下ノ使  
 臣ヨリ佛國外務卿へ其ノ旨ヲ通牒スヘシ  
 千八百八十四年三月十四日巴里府ニ於テ追加條約  
 二十六通ヲ作ル

(署名ハ略ス)

初令無効 明治二十年二月二十一日  
朕茲ニ海底電信線保護萬國聯合條約ノ説明書ヲ公  
布セシム  
御名御璽

明治十八年七月第十七號布告海底電信線保  
護萬國聯合條約ノ意義ヲ明確ニスル爲メ  
各國全權委員ノ議定シタル説明書

明治十七年三月十四日（西曆千八百八十四年）ノ  
海底電信線保護萬國聯合條約ニ調印セシ各政府ヨ  
リ出セル下名ノ全權委員ハ該條約第二條及第四條  
ノ意義ヲ明確ニスルヲ便宜ナリト認メタルニ依リ  
同意ノ上説明書ヲ決定セリ

明治十七年三月十四日（西曆千八百八十四年）ノ  
條約第二條中ニ記入セル「故意」ト云ヘル文字ノ  
意義ニ疑惑ヲ生シタルニ依リ若首條中刑事上ノ責  
任ニ付テノ規定ハ海底電信線ノ切斷又ハ破損ヲ豫  
防スル爲メ精々注意ヲ加フルト雖其ノ修繕ノ際不  
慮ノ事ニ依リ或ハ已ムヲ得スシテ他ノ海底電信線  
ヲ切斷又ハ破損セシメタルトキニハ之ヲ適施セザ  
ルモノト約定ス  
又該條約第四條ハ海底電信線ノ所有者其ノ海底電  
信線ヲ布設シ又ハ修繕スルノ際他ノ海底電信線ヲ  
切斷又ハ破損セシメタルトキ各國ノ相當裁判所ヲ  
シテ其ノ法律ト事件ノ情狀トニ從ヒ民事上責任ノ  
有無ヲ判定セシメ果シテ其ノ責任アルコトヲ認定

シタル上ハ其ノ責任ノ結果ヲ決定セシムルコトノ  
外他ノ目的ヲ有セザリシコト且他ノ効力ヲ有ス可  
ラサルコトヲ約定ス  
明治十九年十二月一日（西曆千八百八十六年）各  
國全權委員巴里ニ於テ調印ス日耳曼全權委員ハ明  
治二十年三月二十三日（西曆千八百八十七年）同  
所ニ於テ調印ス

（署名ハ畧之）